

緊張緩和につながらず

今回の会談を機に米中間の緊張が緩和するとは思わない。共同声明や共同会見はなく、発表された成果も限定的だったからだ。

軍事対話の再開で合意したが、問題は機能するかどうかだ。中国側がどのくらい確信を持って取り組むかは見えなかった。米政府は中国の核戦力や人工知能の軍事利用について議論していくと説明しているが、今後どう具体化するかは不明だ。

両国が思い描いていた成果を得たかは疑問だ。中東情勢に関しても、バイデン氏の声明では



佐橋亮

東大東洋文化研究所准教授

中国への具体的な言及はなかったが、本当は中国に果たしてほしい役割に踏み込みたかっただろう。中国側からみれば、米大統領の歓迎を受け、対等な関係で言うべきことを言ったとアピールすることでメンツは守れた。ただ本当は米国が中国企業に科した経済制裁の緩和などを引き出したかったはずだ。

ペロシ米下院議長（当時）の台湾訪問からわずか3カ月後に開かれた前回の首脳会談に比べると、今回は対話の雰囲気醸成されてきた。両国とも対話の素地を残していきたいという意

志はあり、徐々に関係を構築できてはいる。ただ、それでもこの程度の成果にとどまるのが実情だ。米中ともに国内に反中あるいは反米意識の強い世論が存在するため、思い切った融和の姿勢を打ち出せない。

来年は台湾総統選や米大統領選がある。米中関係にとって激動の年になるのは目に見えている。今回の会談は、その前に両者が「ひと息ついた」ようなものだ。信頼関係が築けていないことは、バイデン氏が記者会見で習近平氏を「独裁者」と呼んだことから明らかだ。米中の対話と対立のバランスは定着しておらず、突発的な難事が起きれば崩れてしまうだろう。

【聞き手・五十嵐朋子】